

小学校生活科における実践研究

和歌山大学教育学部 高橋多美子
和歌山大学教育学部附属小学校 上田恵
和歌山市立湊小学校 平松理恵
和歌山市立宮北小学校 赤井泰子

1. 研究の目的

本研究は、小学校生活科における授業内容、授業方法等に関する情報交換を基に、探究力や省察性を育む授業づくりを目指すことを目的とする。

近年、子どもが1960年代の高度経済成長以降、都市化・少子高齢化・情報化等により、子どもを取り巻く社会環境や自然環境が変化している。子どもの遊び環境に詳しい仙田満(1992)は、砂場がどのような遊具より優れていること、箕輪潤子(2008)は、砂遊びが子どもの満足をもたらすことや社会性の発達を促すことなど、幼少期における砂遊びの有用性を述べている。

しかし、笠間浩幸(1988)は、1980年代の終わり頃から保護者の間では、砂場の衛生に関する不安が囁かれ、砂場から子どもが遠ざけられつつあることを報告している。授業実践を行った学級においても、これまでに泥団子を作ったことがある子どもは約半数であった。

また、生活科の教科書において、土を題材とした箇所は2ページであり、動植物と比較すると取り扱いが少ない。さらに、土に関する学習内容は、高学年の理科の「流れる水の働きと土地の変化」「土地のつくりと変化」のみで、中学年においては取り扱っていない。

そこで、本研究では、子どもが土と関わり、土に対する関心や興味を高めると共に、探究力と省察性を育てる授業づくりを模索する。

2. 授業づくりに向けての取り組み

10月末の研究授業に向けて表1に示すように討議・授業参観を行った。

題材に関して2学期に実施する生活科の内容に関して、一般的には「秋の自然」「祭り」「お店屋さん」等が挙げられる。附属小学校の1年生は、これまで動植物への関わりや廃材を活用した製作などには取り組んでいるが、「土」に触れることが少ない現状や、上記に記したようにカリキュラムの中で高学年まで「土」に関する学習がないことから、「土」を題材にして生活科の授業を展開することにした。

そして、子どもの探究力や省察性を促すために、

「強い泥団子作り」を目的に挙げ、友達とコミュニケーションを図りながら、試行錯誤して泥団子作りに取り組む計画にした。また、子どもの意欲を高めるために、「泥団子バトル」と名付け、滑り台から泥団子を転がして壊れるかどうか調べると共に、子どもの省察性を促すために、授業の最後に振り返りを行い「見つけたよカード」に記録する等計画した。さらに、「土」に対する興味関心を高めるために、絵本「どろだんご」や簡易顕微鏡の活用を勧めた。

子どもの探究力や省察性を育むために、体験を重要視しているため、保護者には間接的な情報を与えないようお願いする等の配慮を行った。

表1. 授業づくりに向けての計画

日にち	内 容
8月1日(水)	1年生生活科の題材に関する討議
10月10日(水)	附属小学校1年生生活科授業参観 (泥団子バトル1回目)
10月15日(月)	生活科授業に関する討議
10月27日(土)	附属小学校1年生生活科授業参観 (泥団子バトル3回目)及び討議

3. 授業実践

(1)10月10日(泥団子バトル1回目)

これまでの「土」を題材にした授業の中で、写真1に示すように、校庭内の10カ所の土をクリアカップに採取し、色や粒の大きさが異なることを調べていた。また、第1回目の泥団子バトルの前時に、子どもが泥団子を作成しており教室のロッカーの上に保管していた。その泥団子を校庭に持参し、写真2に示すように、プレイランドの滑り台を活用し泥団子バトルを実施したが、中には当日までに泥団子が壊れて、応援のみの子どももいた。一人ずつ、滑り台の上から泥団子を転がすと、途中で泥団子が割れたり、粉々になったりして、原型を留めたものはなかった。しかし、その中でも原型の形に最も近い子どもに、他の子どもが「どのようにして作ったのか」「どこの土を使ったのか」等の質問をしていて、より強い泥団子を作ろうとする探究的な姿勢が見られた。



写真1. 10カ所の校庭の土



写真2. 滑り台を活用した泥団子バトル

(2)10月27日(泥団子バトル3回目)

第3回目の泥団子バトルでは、45分内に授業の振り返りまでを実施するためと子どもの集中力を持続させるために、泥団子を転がす場所を2カ所にした。しかし、子どもたちは徐々に友達泥団子の転がる様子が気になったり、泥団子同士が接触するのを避けたりするために、一人ずつ転がした。この様子から子どもが泥団子を大切に思っている気持ちが窺えた。

今回は、どの子どもも泥団子を大事に扱っており、泥団子が壊れることなく、全員がバトルに参加でき、写真3に示すように、友達の泥団子の転がる様子をよく観察したり、友達の応援をしたりして、全員が夢中になり取り組んでいた。写真4に示すように、ほとんど壊れなかった子どもは、担任教員に泥団子を見せ、嬉しそうにしていた。泥団子バトルの結果、ほと



写真3. 友達の泥団子の位置を知らせる子ども



写真4. 壊れなかった泥団子を先生に見せる子ども

んど壊れなかった子どもは3人であった。

教室に戻り振り返りを行うと、子どもたちは前回以上に積極的に、強い泥団子を作った3人に質問した。その結果、その3人の共通点は、プレイランドの土を使用していることであり、次回の授業課題が明確になった。

4. 成果と課題

子どもたちは、授業だけでなく休み時間や放課後も強い泥団子作りに取り組んでおり、子どもの興味関心の広がりを実感した。一般的に生活科の教材として、拡散的思考を伴う学びが多いが、今回は子どもなりに自分の持っている知識と友達からの情報を取捨選択し、拡散的思考と収束的思考を繰り返し、新たな考えを生み出している様子が度々窺えた。問題解決の過程には、このような過程が重要であり、本実践から探究的で省察性のある学びが感じられた。

本実践から生活科「土」を教材した授業が、小学校1年生におけるスタートカリキュラムの1つとして有効ではないかと協議された。子どもが友達と共に夢中になったり、没頭したりする体験は、多様な問題解決の方法や表現が生まれ、学ぶ楽しさを感じる子どもになると考えられる。

今後の課題として、さらに多くの授業を参観・協議を行い、子どもの気付きや考えを詳細に分析し、「泥団子バトル」の教育的効果を明確にすることである。また、小学校1年生におけるスタートカリキュラムの新たな教材を模索することである。

引用・参考文献

- 笠間浩幸：「子どもの遊び環境としての〈砂場〉—砂遊びから見る子どもの発達と〈砂場〉の役割—」『環境教育研究』第1巻第1号，113-124頁，北海道教育大学環境教育情報センター，1998年。
- 仙田満：『こどものあそび環境』，筑摩書房，1986年。
- 箕輪潤子：「幼児の砂遊びの発達過程—遊びの構造と展開に注目して—」『発達研究』第22巻，141-149頁，2008年。